☯☯☯☯☯

最近、私はとある人物を追っています。
これはお父さんにも友達にも秘密です。
(だって絶対に、反対されるもん)
夏休みの自由研究で出逢った、あのヒーローだけど、ダークな方『ルナティック』を探してます。シュテルンビルドのヒーロープラス α(あるふぁ)。
「タナトス」の意味もしっかり、図書館とグーグル先生から調べてきました。
(でもこれで意味、合ってるのかなぁ…)

ユーリは夕食後の紅茶を広いリビングで寛(くつろ)ぎ飲んでいると、ずずいっと楓に迫られた。
「ユーリさん、お話したいことがあります、良いですか?」
「――はい、何でしょうか」
男というものは、いかなる状態の時でも女性から『話があるんだけど』と言われると、途端にメンタルが豆腐になる
生き物である。父親譲りの頑健な肉体を保持し、優秀な頭脳を持った生え抜きの司法局員であっても哀しいかな、それは変わらない。内心かなりドキドキしてきて、ウッカリ顔に痣(あざ)が出るんじゃないかと挙動不審になりかけた頃、重々しく楓は口を開いた。
「実は私、ルナティックを探しているんです」
ピタリとユーリは停止した。しん、とリビングが無音になる。
「…――ハイ?」
手に持ったティーカップが、滑り落ちそうだ。
「ユーリさんに逢う前、私はルナティックに逢ったことがあるんです。訊きたいことがあったのに、あのダークヒーローさんはすぐどこかへ行っちゃって」
(良かった!! バレてないっ)
ほっとしたのも束の間、ユーリは顔を勇ましく上げて熱弁を奮う少女に否、それは否と首を横に振った。
「楓さん、あんな危険人物に貴女が逢うだなんて、とんでもないことですよ」

「えぇと、ユーリさんは私よりもきっとルナティックのことは、いっぱい知ってますよね。そんなに危険って、どんな人なんですか？」
「あれはもう、酷い変態です」
（こう云えば、逢う気もなくなるだろう）
ちなみに公務員にも変態は多い（コンパニオンアンケート調査より）
「変態……」
「はい、あいつは変態なんです。まずルナティックは中二病で、何かと『タナトスの声』という常人一般人には理解し難いルールで動き、ポージングは必ずモデル立ちです」
「た、確かに！」
「その上、神出鬼没です」
　自分は全部ルナティックの予定を知ってるけどね！　とは言えない、口が裂けても言えない。いや、裂けるくらいなら言っちゃうかもしれないけどと、ユーリは真顔を作って答えた。
「どこから来て、いつというのも分からないってことですよね」
　何処（どこ）から来て何処へ行くのか、と言ったのは画家のゴーギャンだったか。楓は時々、哲学的である。
「私、気になってることがあるんです。確かに神出鬼没ではあるかもしれないんですけど、平均統計を取っていたら現れるのは大抵、夜が多いって。きっとそれにも意味はあるんだと思います。ルナティックはお昼に寝ているんでしょうか」
　全部エクセルで管理してますと言った楓に、ユーリは凄いですねと息を呑んだ。ちなみにユーリはまだスマフォを使いこなせていない。タッチパネルよりボタン派である。
「ルナティックに逢って、どうするんですか」
　楓の探求心が本物だと悟ったユーリは、そちらに興味が沸いた。
「タナトスの声、について訊きます」
「…その為に、逢いたいんですか？」
「お話も聞きたいんです。確かにユーリさんが言うみたいに、酷い変態で根暗な引きこもりかもしれなくて理解は全然出来ないかもしれませんけど。でも、知ることから始められることもあるって思うんです。ルナティックの正義とか」
「楓さん…」

酷い変態とは言いましたが、根暗な引き籠(こも)りとまでは言ってないですし、しかも結構ビンゴに近いんですが、貴女が神かとユーリは唸りそうになった。

「もしかしたら、雨の日に濡れた仔犬を拾ってしまうような優しい人かもしれないじゃないですか。どういう理由でヒーローをやっているのか、それも知りたいんです」

今時、ドラマでもやらないようなベタ過ぎる展開だが、楓はあくまで真剣である。

「そこでデスね、ユーリさんにも、ちょっと手伝ってもらえないかなって」

「私に、何をでしょうか」

楓はすっくと立って腰に両手を当てた。

「ヒーローやります！」

「え…っ？」

「スポンサーのいないヒーロー同士になったら仲間ですよね、だから謎のヒーローやります」

なんだそのカテゴライズは。

「その、それは全然関係ないかと」

「ユーリさん、一回だけで良いんですっ。逢って、ルナティックとお話したいだけなんです。あの人を、あのまま放っておけない感じがして――…」

楓の心の琴線に触れるなんの事故が起きているかはユーリにはさっぱり理解(わか)らなかったが、その間にも揺れていた。

「今回だけですから」という単語に。

下手に反対をして、行動力のズバ抜けている彼女を暴走させるのが一番不味い。これでは彼女の養育を任された義務を、怠慢から反故にするようなものだ。

大手企業が粉飾決算をする時に会計士へよく使う「先生お願いしますよ、今回だけですから。来期まで保たないと申告どころじゃなくなるんですよね」これを出されると皆、悪に手を染め易くなるマジック。ユーリは朝、経済雑誌のこの特集を読んでいたが、全く思い出すことはなかった。楓の目力は半端ない。

「今回、だけなんですね？」

「勿論です、それに危ない橋は渡りませんから」

なんの会話か判らない話をし、二人は密やかに『ルナティックと楓様が、ダークヒーローとして出逢って交流を深める』

計画を練り始めたのだった――。

楓はファンシーなシャーペンをスーパーのチラシの裏に走らせ、計画を立ててゆく。リビングはにわかに特設本部になったのである。

「どう考えても、顔出しはＮＧだと思うんですよね、すぐバレちゃいますし」

声はヘリウムガスで誤魔化した方が良いでしょうかと、楓はアマゾンを検索しながら提案したがユーリは身体に悪いからと却下した。

「一番良いのは、模倣犯だと思います。ルナティックそっくりの格好をすれば、バレないんじゃないかなって」

「…難しい単語を、よく御存知ですね」

昨日やっていた刑事ドラマで覚えました！　と楓は元気よく応えた。

「まぁ、確かにルナティックはマスクですから顔は出ませんし、一回だけなら過激なファンの行動。と、いうことで済むかもしれませんからね」

逢って話すのが目的なのであれば、捜査妨害や器物破損とは関係ない。また、楓が言うには殺人は止めたい、のだそうだ。

「アカデミーのエスケープ出来る子から能力をコピーしてきます。ルナティックがテレビに出たら、すぐエスケープです」

こういう時、コピー能力は万能である。

「ただ逢っても…話など通じないかもしれませんよ?」

「はい、そうなんですよね」

（でもどうしてかな、『私』は『逢わなければいけない』気がする――）

「ごめんなさい、ユーリさんをこんなことに巻き込んでしまって…」

「私は貴女へ『信愛』を約束しました。それにこれっきりだと言うのですし、お手伝いしますよ」

「ユーリさん…!!」

頷くユーリへ少女は感極まって抱きついた、少女の頭はぽすんとユーリの腹に当たる。体温の高い背中をポンポンと叩く。

（こっそり突撃されるのは、下策というもの――。計画さえ

判っていたら煙(けむ)に巻ける。こんな幼い彼女に『私の正義』は分からないだろう）

ユーリの色素の薄い双眸(そうぼう)は仄暗(ほのぐら)い火を灯す。抱きしめられている楓は、それを見ることは適わない。

――深い闇を、感情を、表情に出さなくなったのは何時からだったろうか。

でも、彼女を蔑ろにしたい訳でもない。ただ、一言で語ることも出来ず理解もまた、不要なだけだ。

「ルナティックのコスプレをしないといけないですね、作れるでしょうか」

「あ、あはははは、そうですね、一緒に作りましょう」

数日後、ユーリの恐るべきミシンがけの早さで、衣装は完璧に出来上がった。楓もまたユーリや他のアカデミーの生徒達に接触しないように気をつけながら、エスケープの力をいつでも発揮出来るように準備万端にしていた。携帯電話もヒーローTVが始まったら通知されるよう設定することも忘れない。今か今かと待機していた週明け、携帯電話がルナティックの登場を楓に告げる。

既に二十二時を回っており、そろそろ寝る時間だったが、楓はハンガーに掛けていたスーツを慌てて着込む。マスクもしっかり装着したのを立ち鏡で確認してから。事件発生現場へとエスケープしたのだった。

マリオは絶叫していた。

「おおっとーーー!! 何だ!? あれは人か、それとも鳥か新手の犯人かっ！」

楓は雄々しくマントを翻しながら登場を果たした。

（バーナビーだって、最初は名乗ったりしないで活躍してたよね）

犯人を追いつめるヒーロー達の中に、エスケープ能力を持つ者は居ない。楓はトップでビルの屋上に居るルナティックの元へと追いついた。

ボウガンは、青と緑の炎に包まれている。

その直線上の距離に犯人は居た、命乞いをしてる。
（うん、この人だ。殺させちゃ、駄目――）
「ルナティック!!」
楓は腹から大声を振り絞った。ルナティックと同時に犯人も楓を振り返る。
「なっ、なんだオマエ！　こいつの仲間なのか!?　クソッ、ここで殺られてたまるかよ!!」
マリオの解説だとこの犯人はネクストではないが判断能力は低く、スタンガン等、重装備で固めている危険な強盗犯らしい。全身黒尽くめの犯人が巨漢を揺すり、楓めがけて突進してきた。楓は辛くも一撃をひらりとかわすが、男はナイフを振り上げ続けざま攻撃してくる。
（お父さん…っ!!）
「うっぎゃあぁあ！」
エスケープする前に野太い断末魔が放たれた。
ナイフを振り上げた手は蒼く燃えている。ルナティックがボウガンで射抜いたのだ。
「幼き者よ、失せよ」
「ありがとう、ルナティック！　後は任せてっ」
「…なんだと?」
皓々と輝く紅い満月を背に、楓は手を振ると高く跳躍する。
「こんのおぉお強盗犯！　覚悟しなさいっ」
ヒーローは肉弾戦であり能力戦だ。
（尊敬するパオリンさんみたいに棒術は使えない、力だって増えない、能力は二つ持ってない。だけど――）
どんな人だって息は吸うし、鼻や口は出してる。目元をちょっと隠せたとしたって。

楓は太股に装着していたスティックを手に持って凛々しく構える。今度はルナティックに向かって突進しようとする犯人へ、スティックのボタンを押して振り回した。
「ぐはあぁっ！」
真っ赤な粉末が犯人の鼻や口、目に飛散する。カプサイシンマックスだ、カラス撃退用の唐辛子である。ルナティックは楓がボタンを押したのと同時に後方へ移動し、難を逃れている。
楓は、ぎゃあ辛い・辛いようとクシャミを連発する犯人へ、間髪置かずにボタンを押す。スティックの先から刃物でも

切断の難しい、特殊素材のネットが飛び出した。ぶわっと転げ回る犯人に勢いよく絡む。これも、カラス撃退用品を改造したものだ。

（強い…、本当に十二歳か!?）

やけに肝も座っているし、物凄く漢らしい。大体、助けたけれどエスケープ出来るのであるからして、その助けも要らなかったかもしれない。自分が居なくても勝っていただろうことに思い当たりルナティックこと、ユーリの気は完全に削がれてしまった。

楓は、ジタバタともがく犯人へ立ち塞がる。

「まだヤル気なら、私がコテンパンにしてあげる」

ステイックをくるくる回す楓は、文句無しに格好良い　ヒーローだった。犯人は鼻水と涙を一斉に垂れ流しながらセメントに手を着き、ふんぞり返っている楓を見上げる。

「参りました」

完敗宣言の間に、ルナティックはビルから飛び降りた。気づいた楓は犯人を放置して、それを追う。

「謎のヒーロー、ルナティックと共に消えましたァッ！」

スイッチングルームでマリオの説明を聞いていたアニエスは、画面にひたすら喰いついている。

「ねぇ聞いてないわ、どこのスポンサーの子よ!!　ああでも良いわ、グングンきてるわ、視聴率！　ナマ放送はアクシデントがなくっちゃね」

「…はぁ、そうですネ」

もじゃもじゃ頭のケインは疲れていたが、嬉喜とする鬼上司に愛想笑いを浮かべた。

「でもこれじゃ他のヒーローはポイント付かないですよね、犯人確保した訳じゃありませんが、それに準ずる内容ですし」

「――あ、そうね」

二人はご愁傷様、と見せ場を全部奪われ憤慨しているヒーロー達へ手を合わせた。

現場はまだ混乱していた。ルナティックだけでも異色なのに、全く同じ格好をした子供が犯人を片づけて仕舞った。ポイントは救助くらいしか付かない。大半のヒーローが　ポイントゼロの戦績だ。

「くっそお！　ルナティックの奴、相棒連れてきたのかよ!!」
「虎徹さん、これでは僕達とキャラが被って仕舞います、僕達も負けていられませんよ」
　虎徹とバーナビーは、唐辛子まみれの犯人を警察に引き渡しながら腕をクロスしあってバディは負けない！　と誓い合っていた。

　現場から相当離れた場所にルナティックと楓は居た。
「私は鏑木楓。あなたに、逢いに来たの」
　廃ビルの屋上で、二人は対峙していた。楓はマスクを取る。
「……――」
「ルナティック、教えて。『タナトスの声』って何？　あなたはどうして人を殺すの？」
　少女の問いかけはサラと風に流れるだけだ。異形のヒーローは、微動だにもしない。
「答えられないのは、やましいから？」
　じり、と間合いを詰める楓にルナティックはようやく声を発する。
「幼き者よ、汝に問う、お前の正義とはなんだ」
「私の…正義？」
「そうだ」
　ルナティックは深く頷く。早く答えを差し出せ、と言っているかのようだ。
「困っている人がいたら、助けることよ」
「ほう、『道理』には適っているが…正義とはまた『不正を憎む』ことでもある」
「それは――、悪いことをした人を許さないっていうこと？」
「何者も、自身の罪からは逃れられぬ」
「それが、タナトスの声なの？」
　ルナティックは、ちいさなヒーローを一瞬だけ見つめると、あっという間にビルから飛び降り掻き消えた。

　独り、楓だけが残された。
「不正を憎む、許さないのも、正義――」
（ヒーローって…何なんだろう。悪い人をまずやっつけて市民を守る人よね、これって困ってる人を助けてる。でもやっつけるってことは不正を許さないってことだし）

「でもね、私、あなたに人を殺してほしくないの」
だってやっぱりヒーローだから。
私を助けてくれたじゃない。だからきっと、悪いばっかりの人じゃないよね？
「…また、逢えるかな」
バーナビーとお父さんが先に捕まえちゃうかもしれないケド。
「帰ろう…」
ユーリさんはもう寝てるだろうから、そっと。
楓は夜の街からエスケープした。

翌日、ルナティックのちいさな相棒として、楓はメディアに大々的に取り上げられていた。二人は朝食を食べながらテレビを見ている。
「どうやら無事、逢えたようですね。お手柄じゃないですか、犯人も撃退して」
「それは、たまたまなんです、でもルナティックとお話が出来て良かったです！」

お腹が空いていた楓は、三枚目のパンに手を伸ばした。
「どうでしたか？」
「うーん、ますます分からないことが増えて気になってます」
「そ、そうですか」
「無理を言ったのに協力してくれて、本当にありがとうございました！」
「いえ」
（良かった、気が済んだようだな）
（アプローチ方法変えたら、もっとお話出来そうだったんだけどな）
胸の内は秘密である。

楓だけはまた、そう遠くない内に、ルナティックに逢える予感がしていた。